The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『牟尼意趣荘厳』から回収された
チャンドラゴーミンの『入三身論』梵文断片

李　学　竹

はじめに

多作で知られるアバヤーカラグプタ（1125没）に帰される作品22点のうち，『牟尼意趣荘厳』（*Munimatālaṃkāra*, *Munimata* と略す）は，顕教作品の主著といえる．そこには大乗仏教の思想体系と修行体系が組織的に描かれるため，本書はインド仏教終焉期の顕教の集大成といっても過言ではない．本書は，デルゲ版にして，220葉ほど（D no. 3903, mdo 'grel, a, 73b1–293a7）に亙る大部のテクストであり，従来は蔵訳が伝わるのみであった．しかし近年，中国蔵学研究中心に所蔵されるその梵文写本（202葉）の影印版を拝見する機会に恵まれ，その解読成果を発表してきた．

『牟尼意趣荘厳』は全4章からなる．すなわち，第1章「菩提心明示」（bodhicittāloka），第2章「菩提心修習明示」（bodhicittabhāvanāloka），第3章「八現観明示」（aṣṭābhisamayāloka），第4章「仏徳明示」（guṇāloka）である．磯田氏は，同書第1〜2章の蔵文を校訂し，第1章の蔵文部分訳と概観および第2〜3章の蔵文全訳をおこなっている（書誌情報は李・加納 2015: 7 を参照）．

本書は『現観荘厳論』の注釈書の一つと見なされ，例えば，ツォンカパの *gSer phreng* は，本書を21点の『現観荘厳論』の学習参考書の一つにあげる．しかしながら，本書は『現観荘厳論』の本文を引用して逐次注釈を施すのではなく，菩提心，三身説，戒律儀といった主題を取り上げて議論を展開する上に，他の経論を引用するというスタイルを取っている．その引用された豊富な経論の中に，原典がすでに失われたものが少なくない．従って，本書の梵文写本を得られたことによって，断片ではあるが，それらのテクストが梵文のかたちで新たに確認できるようになった点は，非常に意義深い．

これまで加納博士（高野山大学）と共同で，同書に引用されるチャンドラキールティの『三帰依七十頌』，『中観五蘊論』，チャンドラゴーミンの『菩薩律儀二十

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

頌』,カマラシーラの『中観光明』及び龍樹の『六十如理論』などの梵文を回収し発表してきた.本稿では,チャンドラゴーミンの作とされる『入三身論』に焦点を当て,その梵文を提示することを目標とする.

チャンドラゴーミンの『入三身論』は蔵訳,漢訳ともに現存せず,梵文写本も伝わっていない.佐久間氏(1993)は他の蔵訳論書に引用される『入三身論』の偈を回収し,さらに*Sekoddeśaṭīkā*から6偈の梵文断片を回収している.その中には『牟尼意趣荘厳』からの引用も含まれている.それをもとに,このたび『牟尼意趣荘厳』梵文写本を調査し,少なくともチャンドラゴーミンの名を挙げた本論と思われるものは4カ所に引用されていることを確認した(Passages A~D).

第一(Passage A)は,八現観を解説する第三章の後半箇所に現れる.すでに磯田氏が指摘されるように,アバヤーカラグプタは「出世間の菩提分など,如幻不二智を自性とする諸法が,法身であって,それは第四(身)である」[1]というハリバドラの四身説を紹介する.これに対して,アバヤーカラグプタは,四身説は「どこにも規定されない.この所立はハリバドラが自分勝手にしたことなので,捨てられるべきである」[2]と痛烈に批判して三身説を主張する.その後に,法身と受用身を説明する.その終わりにチャンドラキールティの『三帰依七十』7–9偈ab句,22–23偈を引用し,その直後にチャンドラゴーミンの名を挙げて『入三身論』と思われる7偈を引く.法身を説明する同7偈は,すでに佐久間氏が分析研究されている.

その他の3カ所(Passages B, C, D)はいずれも仏徳を説く第4章に引用される.まずPassage Bは,先んじて,五智と三身の関係について説く.つまり,法界清浄智と大円鏡智は法身に,平等性智は受用身に,妙観察智と成所作智は変化身にそれぞれ含まれると説明した後に,チャンドラゴーミンの名を明かして,『入三身論』と思われる2偈半を引用する.

そして,Passage Cは偈を引用する前に,阿頼耶識と大円鏡智の関係について論じ,「大円鏡智は自相と共相を所縁とするからである.そして阿頼耶識は,あらゆる分別を本質とする過失の拠り所である.なぜならば,対治の力によりあらゆる過失を離れるからである.転依したそれ(阿頼耶識)こそが,大円鏡智と呼ばれる」と説く.その後に,チャンドラゴーミンの名を明かして『入三身論』と思われる1偈を引く.

最後に,Passage Dは「他の三智もまた転依する」[3]といって,『入三身論』と思われる6偈を引用する.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

以下には『牟尼意趣荘厳』における『入三身論』引用4カ所のロケーションを提示したうえで，各箇所の翻刻を提示し，最後に試訳を挙げる．梵文翻刻の中の記号◉は紐穴を示し，丸括弧（ ）は翻刻者が補った語を示す．

『牟尼意趣荘厳』における『入三身論』引用箇所一覧

Passage	Skt.		Derge	**Trikāyāvatāra*
A	132r3–v5	(3 章)	219b1–4	7 verses
B	182r2	(4 章)	271a1–3	2 verses and half
C	184r1–2	(4 章)	273a3	1 verse
D	185r2	(4 章)	274a5–b2	6 verses

『入三身論』梵文断片

[Passage A: 132r3–5]
ā(cā)ryacandragomināpy uktaṃ |

tathatā dharmakāyo (')sya vikalpānām agocaraḥ ◉
svabhāvaḥ sarvvasatvānāñ ca so (')dvayaḥ ||

mūrttayo viśvarūpasya jagatas tatvarūpatāṃ |
yatraikara◉satāṃ yānti nimnagā iva sāgare ||

so (')yam evamvidhaḥ kāyo dharmmakāyo (')sya tāyinaḥ |
sarvvākāraviśuddhā(132r4)yāḥ sambodher eva gocaraḥ ||

anābhogena lokeṣu sarvvadā tasya śaktayaḥ |
anantam arthaṅ kurvanti sūryasye◉va gabhastayaḥ ||

jātyandhān iva hitvāsmān svapuṇyārjitalocanaiḥ |
sa eko yugapat sarvvair ādi◉tya iva dṛśyate ||

adyāpi tasya śṛṇvanti dharmmāmṛtarasāyanaṃ |
dhanyāḥ puṇyārjitaśrotrā muktvāsmān ba(132v5)dhirān iva ||

viśodhayaty asau satvān tribhir yānaiḥ kṣaṇe kṣaṇe ||
anantān dikṣv anantāsu yathābījaṃ yathāśayam ||

[Passage B: 182r2]

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

tad uktam ācāryacandragominā |

tathatālambanaṃ kaiścid ādarśajñānam iṣyate |
sarvārthākāram aparair iṣṭaṃ ● sarvvārthagocaram ||

yat punaḥ samatājñānaṃ tathatālambanan tu tat |
kṛtyānuṣṭhānavijñānaṃ kāryā●rthākāram iṣyate ||

sarvvārthā (read: sarvathā) sarvvam evāsya vijñānaṃ sarvvaśaktimad ||

[Passage C: 184r1–2]
yad ācāryacandragomī |

yad apy ālayavijñānam ādarśajñānatāṃ | (184r2) mataṃ |
tasyāpi kecid icchanti dharmmadhātusvabhāvatām ||

[Passage D: 185r2–3]
yad uktam ācāryacandragominā |

kliṣṭaṃ manaḥ parāvṛttaṃ sama●tājñānam ucyate |
pratyavekṣaṇakaṃ jñānaṃ manovijñānam eva yat ||

tayoḥ sambhogakāyatvaṃ dharmma●saṃbhogadarśanāt |
mahatāṃ bodhisatvānāṃ dharmmasambhogato 'pi ca ||

ādarśajñānam apy ekakāyaṃ sāṃ(185r3)bhogikaṃ viduḥ |
tasyāpi tatra hetutvād upacārāt tathāpare ||

pañcendriyavijñānaṃ tatsarvvārthaparigra●hāt |
prāpnoti satvārthe kṛtyānuṣṭhānamātratāṃ ||

sarvvadā tac ca sarvvatra kālaṃ yathāśayaṃ |
nirmmā●ṇatayā buddhānāṃ sarvvanirmmāṇakāraṇāt ||

kecit tu mānasasyaiva vidu(r) nirmmāṇakāyatāṃ |
yat pañcendriya(185r4)[vijñānaṃ ta]sya sambhogakāyatām ||

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『入三身論』断片和訳

[Passage A]
師チャンドラゴーミンにより以下のように説かれた.

法身とは真如である. それは諸々の分別の対象ではない.
それは一切衆生たちの本質であり, 不二である.

種々な姿を持つ世界にとって,〔仏の〕諸々の姿は, 真実の姿となる.
そこでは, 一味となる. 河が海のなかで一味となるように.

まさにこのような身体が, かの仏の法身である.
〔法身は〕あらゆる点で清浄となった正覚のみの対象領域である.

その〔法身の〕諸々の能力は, 諸世間において, いつでも無功用に,
無辺の利益をなす. ちょうど太陽の光線のように.

生盲のごとき我々を除き, 自らの福徳から生じた眼をもつすべての者（菩薩）
によって唯一なるその〔法身〕は, 太陽のごとく, 同時に, 見られる.

聾者のごとき我々を除き, 福徳より生じた耳を持った祝福された者たちは,
その〔法身の〕法の甘露の霊薬（rasāyana）を, 今聞く.

この〔法身〕は, 無辺の衆生たちを, 無辺の方々にて, 種子（資質）に応じて,
願に応じて, 刹那毎に, 三乗によって浄化する.

[Passage B]
師チャンドラゴーミンにより以下のように説かれた.

大円鏡智とは真如を所縁とするとある者たちは主張する.
別のものたちは, あらゆる対象を形象として有し,
あらゆる対象を対象領域として有すると認める.

また一方で, 平等性智とは真如を所縁とし, 成所作智は,
為すべき対象を形象として有すると認められる.
この者（仏）の智（成所作智）は, あらゆる点で, 一切の能力を有する.

[Passage C]
以下のように師チャンドラゴーミンは述べる.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

大円鏡智であると考えられている阿頼耶識はまた,
法界を本質とするとも, ある人々は主張する.

[Passage D]
師チャンドラゴーミンにより以下のように説かれた.

平等性智は, 染汚意が転依したものと言われる.
妙観察智は, 意識が〔転依したものと言われる〕.

その両者（平等性智と妙観察智）は受用身である. 法の享受を体験するから.
そして大菩薩たちは法を享受するからである.

大円鏡智はまた, 受用なる一つ仏身であると, 他の人々は知る.
それ（受用身）はまたそれ（大円鏡智）に対して原因であるので,
二次的表現にもとづいて, そのように〔知るのである〕.

五根の識（転識）は, その全ての対象を把捉するので,
衆生利益に向けられた, 純粋な成所作智であることになる.

なぜなら, あらゆる点で, どこでも, いつでも, 願いに応じて,
一方, 諸仏たちは化作の形をとるため, 一切の化作の原因となるからである.

ある者たちは, 意こそが化身であると知り,
五根の識なるものが, 彼（仏）の受用身であることを〔知る〕.

おわりに

以上,『牟尼意趣荘厳』の4カ所にチャンドラゴーミンの『入三身論』から都合16偈半が引用されることを確認した. その中, 3偈は *Sekoddeśaṭīkā* と同一の偈であるので, 新たに得られた梵文は13偈半ということになる. これによってチャンドラゴーミンの『入三身論』の解明を着実に一歩進めることができるであろう.

本稿の執筆および梵文の校訂, 特に偈頌の同定にあたり, 加納和雄氏（高野山大学）にご助力いただきました. 記して謝意を表します.

1) *Munimata*, Skt. Ms. 130v3–4 lokottarabodhipakṣādayo māyopamādvayajñānarūpā dharmā dharmakāyā yaś caturtha iti.
2) *Munimata*, Skt. Ms. 130v4: na kvacid vyavasthāpitaṃ | tadvyavasthāpanan tu svātantryād

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

dharibhadrasya heyaṃ.

3）*Munimata*, Skkt. Ms. 185a1: jñānatrayam aparam api parāvṛttaṃ.

〈参考文献〉

磯田熙文 1982「Abhayākaragupta の Haribhadra 批判」『印度学仏教学研究』30 (2): 30–35.

Skilling, Peter. 1990. "A Possible Citation of Candragomin's Lost **Kāyatrayāvatāra.*" *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 13 (1): 41–51.

佐久間秀範 1993「Candragomin の失われた『三身論入門』」『東方学』86: 132–144.

加納和雄・李学竹 2013「梵文『牟尼意趣荘厳』(*Munimatālaṃkāra*) 第一章の和訳と校訂——冒頭部——」『密教文化』229: 37–63.

李学竹 2012「『牟尼意趣荘厳』(*Munimatālaṃkāra*) の梵文写本について」『密教文化』229: 25–35.

李学竹・加納和雄 2014「梵文『牟尼意趣荘厳』第1章末尾部分の校訂と和訳——『中観光明』一乗論証段の梵文断片の回収——」『密教文化』232: 7–42.

李学竹・加納和雄 2015「梵文校訂『牟尼意趣荘厳』第一章（fols. 48r4–58r5）——『中観五蘊論』にもとづく一切法の解説——」『密教文化』234: 7–44.

〈キーワード〉 Candragomin, *Trikāyāvatāra*, *Munimatālaṃkāra*

（中国蔵学研究中心宗教研究所研究員，文学博士）

新刊紹介

一郷　正道　著

ハリバドラの伝える瑜伽行中観派思想（2015年安居次講）

A5版・144頁・本体価格 3,000 円
東本願寺出版・2015年7月

NII-Electronic Library Service